

県営低コスト化水田農業大区画整備事業
(清水堂地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査概要(3)

富山市水橋清水堂E遺跡
清水堂F遺跡

1998

富山市教育委員会

例　　言

1. 本書は、県営低コスト化水田農業大区画は場整備事業（清水堂地区）に伴う、富山市清水堂F遺跡の発掘調査及び清水堂E遺跡の試掘調査概要である。

2. 調査は、富山県農地林務部富山農地林務事務所の依頼を受けて富山市教育委員会が実施した。調査費用の地元農家負担分については富山市教育委員会が国庫補助金・県費補助金の交付を受けた。

3. 調査の期間、調査面積は次のとおりである。

　　清水堂E遺跡　　平成9年5月19日～平成9年11月5日　　試掘調査　　29,000m²

　　清水堂F遺跡　　平成9年6月16日～平成9年9月24日　　発掘調査　　600m²

4. 調査に当たって、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センターの指導・助言を受けた。

5. 調査及び本書の編集・執筆は、富山市教育委員会生涯学習課学芸員鹿島昌也が担当した。

6. 調査の実施から報告書作成までの間に次の各氏から有益な助言と協力を頂いた。記して謝意を表したい。

　　安達志津・安念幹倫・河西英津子・鈴木景二・橋本正春・宮田進一・渡辺晃宏（五十音順、敬称略）

7. 本書の挿図・写真図版の表示は次のとおりである。

(1)方位は真北、水平基準は海拔高である。

(2)遺構の表記は次の記号を用いた。

S D :溝、S K :土坑、P :ピット

(3)挿図の遺物縮尺は1/3を原則とした。写真図版の遺物縮尺は1/2を原則とした。

目　　次

I 遺跡の位置と環境	1	2. 清水堂F遺跡	5
II 調査にいたる経緯	2	(1)調査の経緯	
III 調査の概要	3	(2)発掘調査の概要	
1. 清水堂E遺跡	3	(3)基本層序	
(1)試掘調査の概要		(4)上層遺構と遺物	
(2)遺構と遺物		(5)下層遺構と遺物	
		(6)まとめ	
		写真・図版	10

I 遺跡の位置と環境

清水堂遺跡は、富山市の東北部の水橋清水堂地区にあり、東は上市町、南は舟橋村に接している。この地区は西に流れる常願寺川の扇状地扇端部の湧水地帯にあたり、白岩川が、明治38年に改修されるまでは曲折して流れ、現在の自然堤防や河岸段丘などの微地形を形成し、現在は集落の外れを流れている川もかつては集落の傍を流れていた。このため川の後に広がる沖積平野部では、豊富な水資源を利用した水田耕作が行われ、河川を利用した水運も発達していた。標高は約9mを測る。

周辺には白岩川の両岸をはじめ、上市川の河岸段丘との間に形成された微高地上の平野部に、縄文時代早期から近世に至る多くの遺跡が存在する。清水堂地区に集落が営まれたのは縄文時代後期から晩期にかけてで、水橋金広遺跡において掘立柱建物を作った集落の存在が確認されている。

弥生時代、特に後期から古墳時代初期には、上市町江上A遺跡や、滑川市魚飼遺跡、富山市金尾遺跡等の集落が周辺に存在し、清水堂地区では清水堂D遺跡で当該期の集落を確認し、各々の関連性が注目される。

古墳時代になると白岩川本・支流域には県内の平野部では希少な「白岩川流域古墳群」と呼ばれる古墳群が形成される。上流域の丘陵尾根上には柿沢古墳群が存在し、中・下流域の平野部に至ると稚兒塚（円墳）・竹内天神堂（前方後方墳）・塚越（円墳）・清水堂・宮塚・若王子塚が見られる。清水堂古墳は平成7年度の試掘で周濠を有する直径約30mの円墳であることが確認されている。

奈良時代に入ると、常願寺川河口右岸に古代の官衙跡と考えられている水橋荒町遺跡が出現する。また、清水堂地区の南約2kmの立山町寺田・泉地区周辺は、「東大寺領大蔵莊」があった可能性が指摘されており、その南には当該期に営まれた辻遺跡が存在し、関連性が注目されている。

立山町を中心とした山地縁辺部では、古代～中世にかけて須恵器生産が行われ（上末窯）、中世末～近世にかけては越中瀬戸焼の生産が隆盛する。清水堂地区においても清水堂C遺跡等から越中瀬戸焼が出土し、その消費地としての役割が想定される。

中世後半から近世初期にかけては小出城や仏生寺城等の城館跡が築かれ、池田館・的場・馬場・専光寺などの地名も周辺に残っている。



第1図 清水堂E・F遺跡と周辺の遺跡 (1:50,000)

II 調査にいたる経緯

平成4年度に、富山市水橋清水堂周辺の約36haの水田を対象として、県営低コスト化水田農業大区画は場整備事業（清水堂地区）の計画が立案された。事業地内には既に周知の遺跡として5遺跡（清水堂A遺跡、清水堂B遺跡、清水堂C遺跡、清水堂D遺跡、清水堂古墳）の所在を確認していたが、一部に未調査地が残っていたため、平成5年1月に富山市教育委員会が詳細な分布調査を実施した。その結果6遺跡（清水堂E遺跡、清水堂F遺跡、清水堂小深田遺跡、清水堂宗平邸遺跡、田伏南遺跡、水橋金広遺跡）を新たに発見し、合わせて11遺跡の所在が明らかとなった。

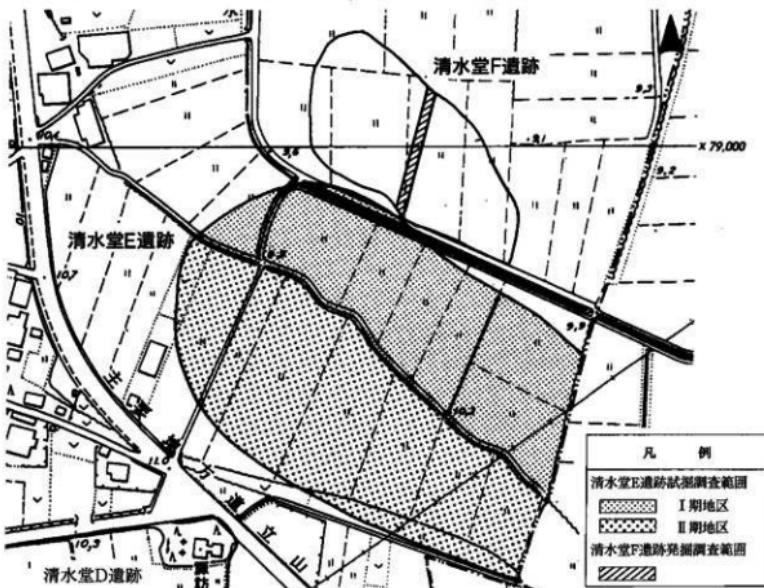
分布調査の結果を踏まえて、富山県埋蔵文化財センター・富山市教育委員会・富山農地林務事務所など関係機関の間で協議を重ね、事業が開始される平成6年度から富山市教育委員会が主体となって、事前に遺跡の試掘調査・発掘調査を進めていくこととなった。

平成6年度は、平成6年12月に清水堂A遺跡と清水堂C遺跡、平成7年3月に清水堂宗平邸遺跡を対象として試掘調査を実施し、それぞれ遺跡の所在を確認した。

平成7年度は、前年度の試掘調査で遺跡の所在が確認された範囲において、は場整備に伴う水田高の調整を行った上、農道敷設工事及び用水路工事に先立ち発掘調査を実施した。また、平成7年12月から清水堂B遺跡、清水堂D遺跡、清水堂小深田遺跡の試掘調査及び清水堂D遺跡、清水堂宗平邸遺跡の発掘調査を実施した。

平成8年度は、前年度の試掘調査により、遺跡の所在が確認された清水堂B遺跡において、は場整備に伴う計画水田高の調整を行った上、農道及び用水路工事にかかる箇所について発掘調査を実施した。あわせて水橋金広遺跡、水橋田伏南遺跡、清水堂F遺跡の試掘調査を実施した。

平成9年度は、前年度試掘調査により、遺跡の所在を確認した清水堂F遺跡にかかる農道及び用水路工事箇所について発掘調査を実施した。あわせて清水堂E遺跡の試掘調査を実施した。



第2図 平成9年度調査範囲 (1:2,500)

III 調査の概要

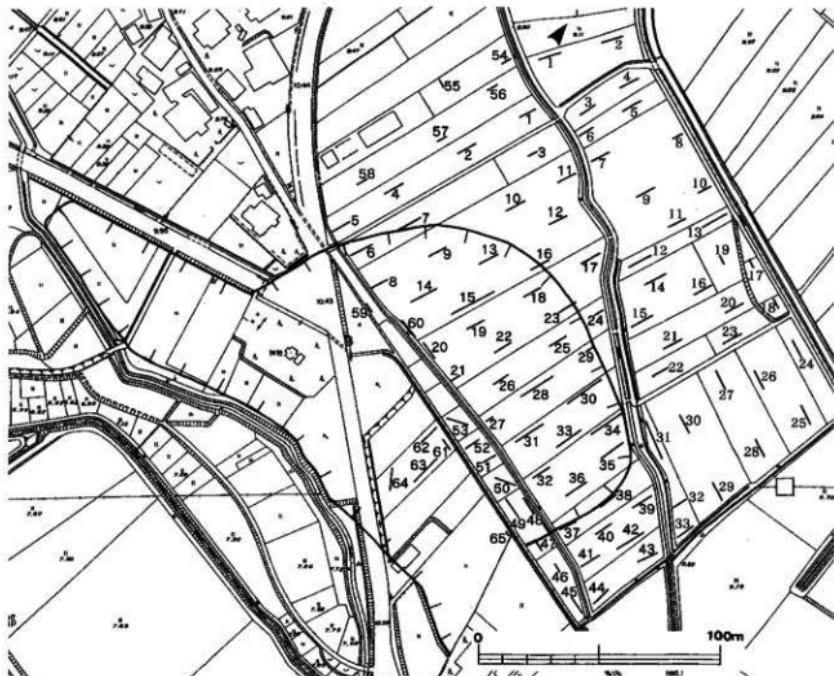
1. 清水堂 E 遺跡（清水堂南遺跡）

(1) 試掘調査の概要

清水堂 E 遺跡は、東側が一部上市町にひろがる遺跡で、ば場整備にかかる富山市域約29,000m²を対象に調査を行った。試掘調査は水田耕作等の関係で上条用水以北の調査対象区約13,000m²を5月（I期地区）に、トレント33本を設定し実施した。残りの約16,000m²は稲刈り後の10月（II期地区）に、トレント65本を設定し実施した。

I期地区においては、若干の遺物の出土を確認したが近隣からの流れ込みと想定され、また遺構が確認されなかつたため、この地区には遺跡が所在しないと判断するに至った。

II期地区においては、試掘調査対象区の中央から南に向かって遺跡の広がりを確認した。遺跡の南は、旧白岩川の流域に向かって下っており、そこに土器が多く投棄されている状況がうかがえた。遺跡は平成7年度に調査を行った清水堂 D 遺跡の方向に範囲を広げており、清水堂 D 遺跡の東寄りの地区も同様の状況を呈している。また、清水堂 D 遺跡と清水堂 E 遺跡の間に南北に走る県道下に、農村下水道を敷設する工事が12月に行われた際に工事立ち合いを行った所、双方の遺跡と共通する時期の遺物が検出された。よって両遺跡が、生後後期～古墳初期を主体とする集落遺跡であると判断されるため、2遺跡（清水堂 D 遺跡及び清水堂 E 遺跡）を1遺跡に統一し、名称を清水堂南遺跡と変更した。



第3図 試掘トレント位置図 (1:2,000)

基本層序は、I期地区では第1層水田耕作土（厚さ25cm）、第2層灰黄色シルト土（厚さ30cm）、第3層暗黒灰色粘質土（厚さ30cm、若干の中世遺物を含む）、第4層灰色粘土あるいは灰色砂質土の地山層に至る。

II期地区の北寄りでは第1層水田耕作土（厚さ20~25cm）、第2層黒色土（厚さ1~20cm、遺物包含層）、第3層淡褐色粘土（遺跡の北端付近は砂質土）の地山面に至る。遺跡の中央付近には、第2層を掘り込んで近世の遺構が確認できるトレンチもある。（50~52T）遺跡の南寄りでは第1層水田耕作土（厚さ20cm）、第2層灰色砂質土（厚さ50cm）、第3層黒灰色粘質土（厚さ5cm、遺物包含層）、第4層灰色シルト土（厚さ15cm、遺物包含層）、第5層黒色粘土（厚さ10cm、遺物包含層）第6層淡褐色地山土に至る。（63T・64T）

(2) 遺構と遺物

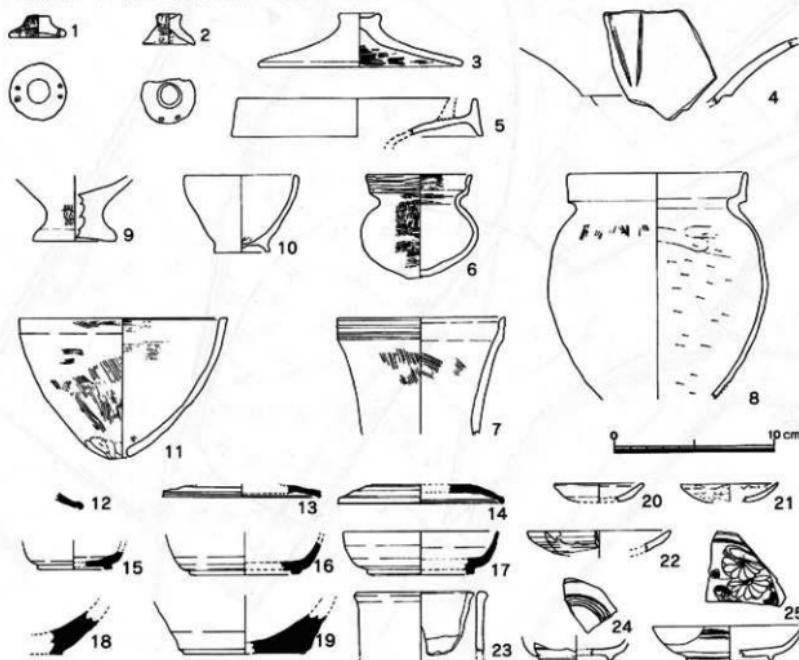
i) 遺構

I期地区には遺構は検出されなかった。

II期地区は試掘トレンチを東西方向に横切る幅0.2m~1.5mの溝跡が第3層を掘り込む形で検出した（6T・8T・13T・14T・15T・19T・22T・23T・26T・28T・30T~36T）。15Tからは小円形のピットを1つ検出した。遺跡の中央付近の河岸段丘の最上部に位置する現況小区画の水田からは、第2層を掘り込んで近世遺物を含む溝跡を確認した（50~52T）。また、53Tには中世から近世の遺物を含む池あるいは大溝の北肩を検出した。遺跡の南端の63T・64Tには旧白岩川の河道に向かい傾斜しており、その肩や斜面に弥生土器が多量に投棄されている状況がうかがえた。

ii) 遺物

I期地区からは弥生土器、須恵器、珠洲焼、土師質土器、越中瀬戸焼等コンテナ1箱分出土した。遺物は第2層



第4図 清水堂E遺跡出土遺物実測図（1/3）

及び第3層より検出されている。近隣からの流れ込みによる遺物と考えられる。

Ⅱ期地区からは弥生土器、須恵器、珠洲焼、土師質土器、越中瀬戸焼、近世陶磁器、漆塗り椀、砥石、ヒスイ原石、砥石等コンテナー10箱分出土した。

・弥生土器

1~3は蓋である。1、2には2対の穿孔がある。2は外外面に赤彩が施されている。4は高杯の杯部で内面にハの字に開く線刻がある。5は装飾器台の受部である。6は有段口縁壺である。外表面全体と内面頸部まで赤彩及びヘラミガキを施し、内面以下はヘラによる撫で調整を行う。7は有段口縁の長頸壺である。8は壺で有段口縁で凹線文は施さない。内面頸部ヘラ削り調整、外表面に一部刷毛調整が観察される。9は台付壺の台部である。10は台付鉢である。底部を除く内外面に粗いヘラケズリ調整を行っている。11は有孔鉢である。底部は尖底形で外表面にヘラ削りを行う。

弥生土器はいずれも弥生時代後期後半に位置付けられる。

・須恵器

12~14は蓋である。15~17は杯で高台が付く。

・珠洲焼

18、19は擂鉢の底部である。19の内面に鉗目が観察される。

・土師質小皿

20、21がある。21の外表面は指頭圧痕が見られ、内面上部には黒色のススが付着している。

・近世陶磁器

22は越中瀬戸焼の小皿である。24、25は肥前焼の皿である。

2. 清水堂F遺跡

(1) 調査の経緯

前年度の試掘調査で、7,800m²に遺跡の所在を確認した。これを踏まえ、富山農地林務事務所と協議を行い、水田面高の調整を行った結果、耕作面にかかる遺構及び遺物包含層は保護されることとなったが、遺跡の中央を南北に走る農道部300m²については、保護措置を要することとなった為発掘調査を実施した。

(2) 発掘調査の概要

発掘調査は遺跡の中央に南北に延びる調査区300m²の範囲について行った。試掘調査の際には単層の遺跡と考えていたが、その地山と考えていた層の下に遺構面が新たに検出され、発掘調査延べ面積は600m²に及んだ。

上層には中世以降の大溝跡1条、溝跡4条、土坑3、小穴を検出した。下層からは大溝2条、中小の溝跡6条以上、風倒木痕3を検出した。下層遺構内からは遺物の検出を見なかった。

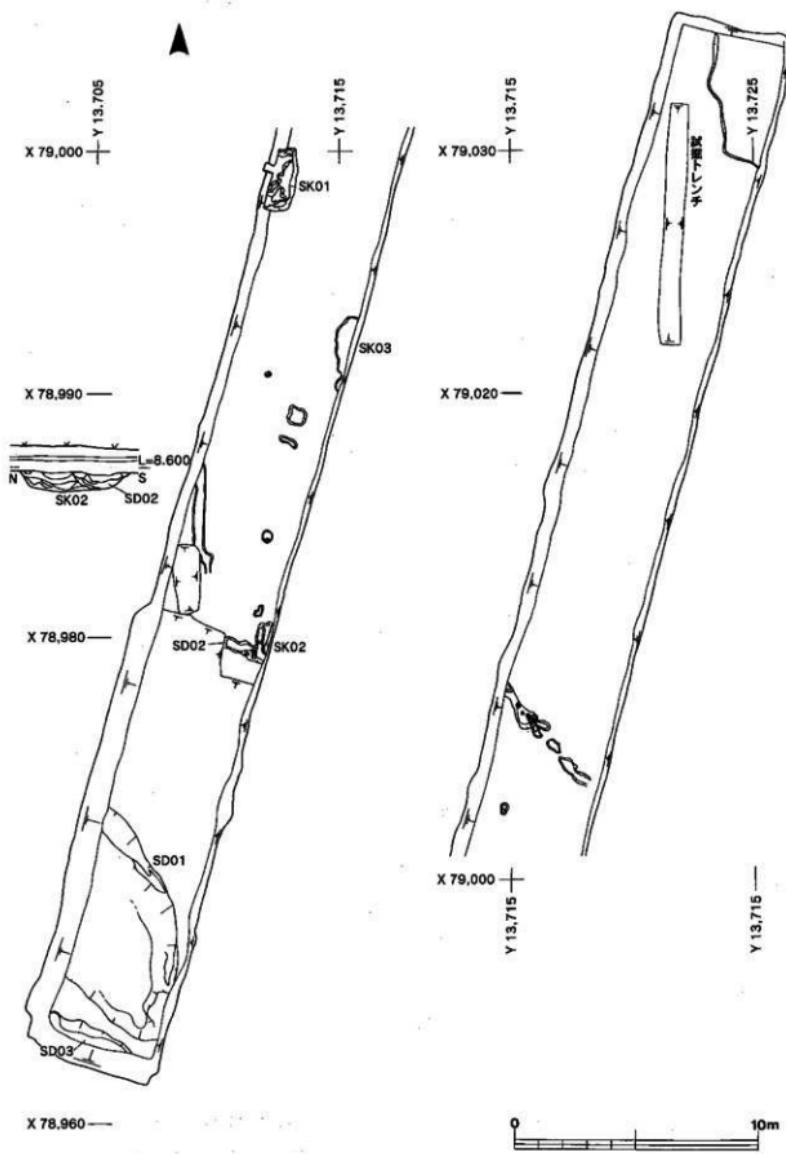
(3) 基本層序

第1層水田耕作土（厚さ25cm）、第2層暗灰色土（遺物包含層、厚さ20cm）、第3層黒灰色粘質土（遺物包含層、厚さ10cm）、第4層灰色粘質土、第5層灰白色土（地山土）となる。第4層を掘り込んで上層の遺構面が存在し、第5層を掘り込んで下層の遺構面が存在する。

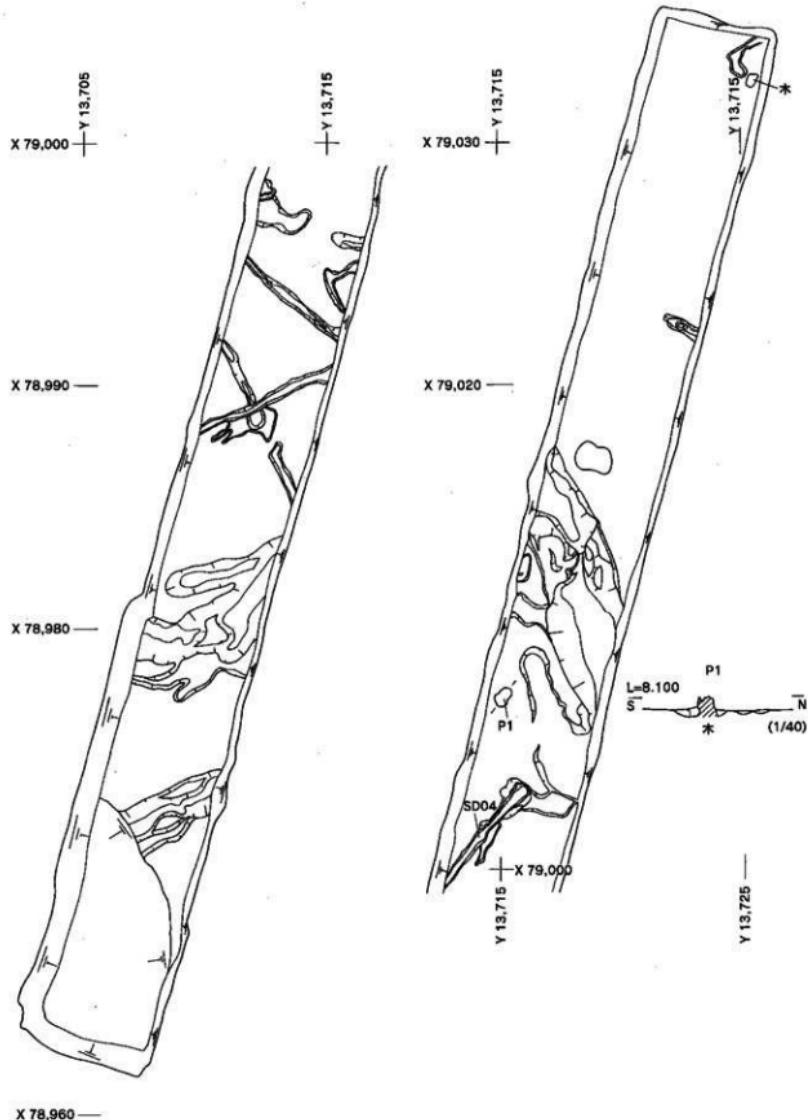
(4) 上層遺構と遺物

S D O 1 (第11図)

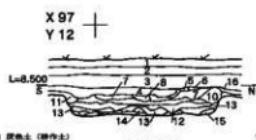
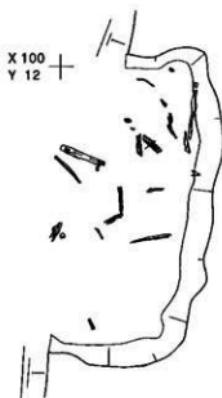
調査区南端に位置する。大溝としたが、南東方向へは延びておらず、遺構の中央に杭列が見えること等から溜め池等の施設とも想定される。出土遺物は珠洲焼（7・8）、越中瀬戸焼（9・10）、近世陶磁器（11）、漆塗木製品（12・14・15）、着状木製品（16）、下駄、杓子、木筒「□□□」（13）等がある。15の着状木製品には赤漆が塗られている。



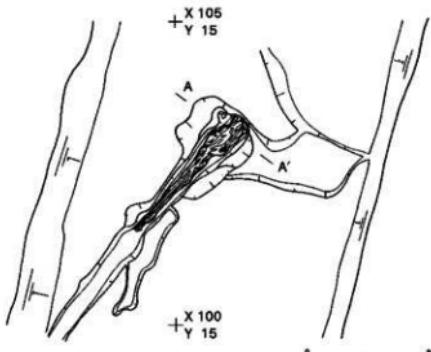
第5図 上層造構平面図(1/200)



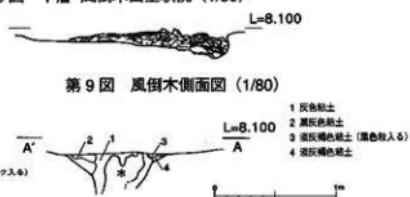
第6図 下層造構平面図 (1/200)



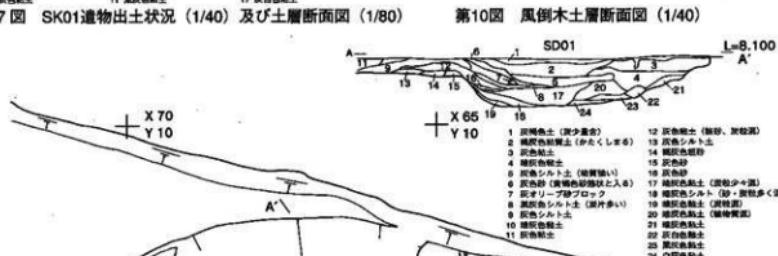
第7図 SK01遺物出土状況 (1/40) 及び土層断面図 (1/40)



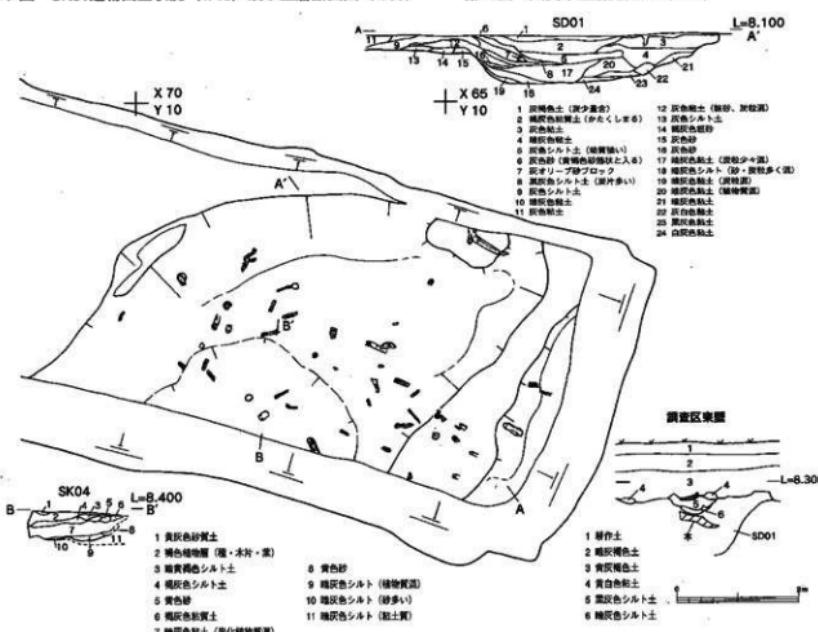
第8図 下層 風倒木出土状況 (1/80)



第9図 風倒木側面図 (1/80)



第10図 風倒木土層断面図 (1/40)



第11図 調査区南端遺構図・土層断面図及び遺物出土状況 (1/80)

S D 0 2

調査区南寄りに位置する。S K 0 2 を切っている。

S D 0 3 (第5図・第12図)

調査区南端に位置する。珠洲焼、越中瀬戸焼 (17)、肥前焼 (18) 等が検出された。

S K 0 1 (第7図・第12図)

調査区中央西壁に接して位置している。覆土は黒灰色粘土を基調とする。出土遺物は木片が多く、木製品 (6)、や土師質土器 (4・5) も見られる。

S K 0 2 (第5図・第12図)

調査区南寄りに位置し、東壁に接する。土師質土器 (3) 1点出土した。

S K 0 3 (第5図・第12図)

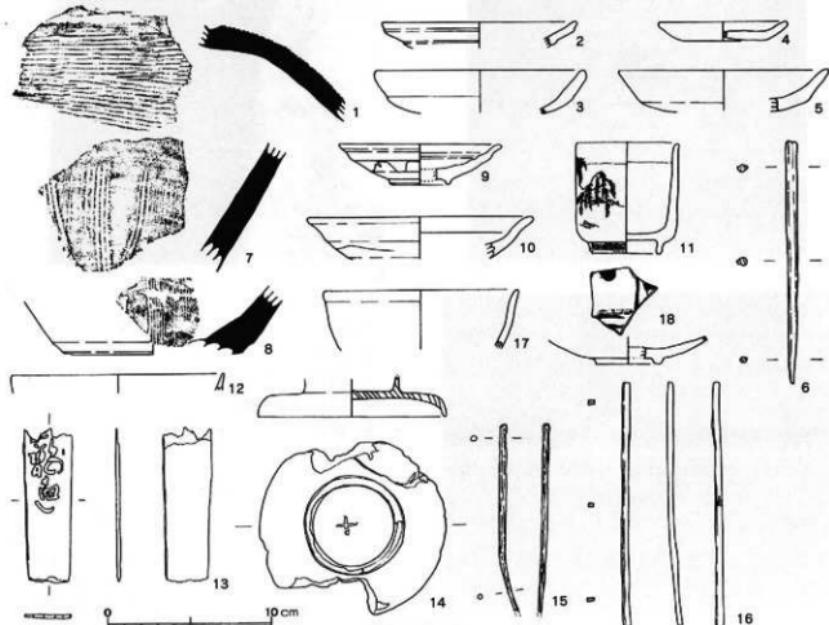
調査区中央南寄りに位置し、東壁に接する。土師質土器 (2) 1点出土した。

(5)下層遺構と遺物

下層には中小の溝跡が数条走るほか、風倒木 1箇所、木根が残る穴が 2箇所検出された。中小の溝跡からは木片が数点検出されるのみで、これらの遺構の年代を決定付ける遺物の出土はなかった。

(6)まとめ

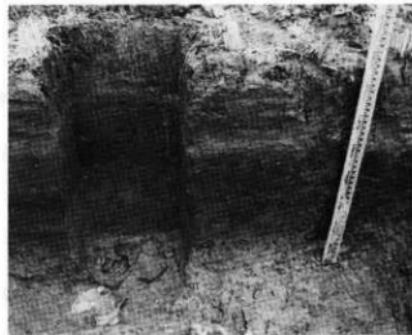
前年度の試掘調査において、遺跡の西寄りに掘立柱建物等に伴うと考えられる小穴群が確認されている。今回の発掘調査で検出された上層遺構に伴うものと考えられる。遺構は狭長な調査区の為、土坑数基と数条の溝跡を検出するにとどまったが、黒灰色粘土の覆土中からは著しく木製品や植物質の遺体（種子・木片等）が残存していた。また、調査区南端の大溝から多くの木製品が検出され、漆塗木製品も蓋、椀、杓子、箸が確認された。遺構の時期であるが、土坑中から検出される遺物に中世の土師質小皿片が検出されている事から、遺跡は中世期（鎌倉～室町期）に形成された集落跡と想定される。調査区南端の大溝は中世から近世、近代にかけての遺物が見られ、時期は他の遺構より下るものと考えられる。大正用水が現在の形に改修される前の水路の影響も受けている事も考えられる。



第12図 清水堂F遺跡出土遺物 (1/3)



1



2



3



5



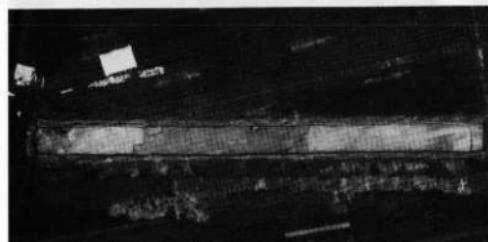
4

1. 6T
2. 21T
3. 62T
4. 62T (赤彩小壺)
5. 64T

清水堂E遺跡



1



2



3



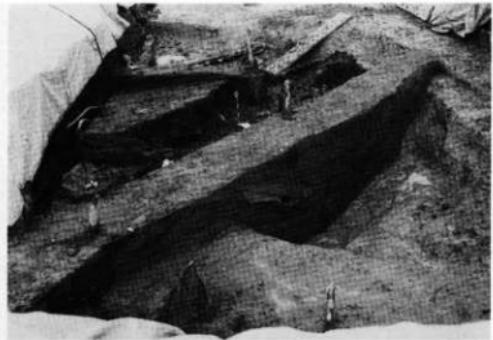
4

清水堂F遺跡

1. 清水堂地区航空写真（右上に調査区）
2. 全景（上層遺構）
3. 南より
4. SK01



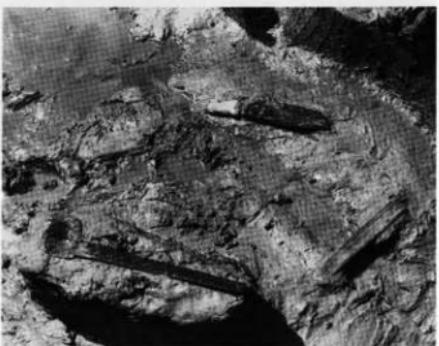
1



2



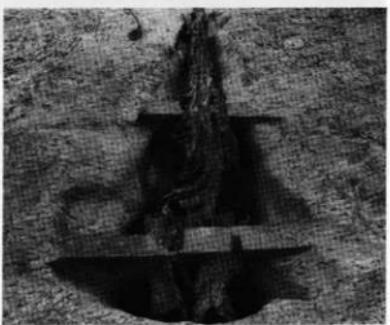
3



4



5



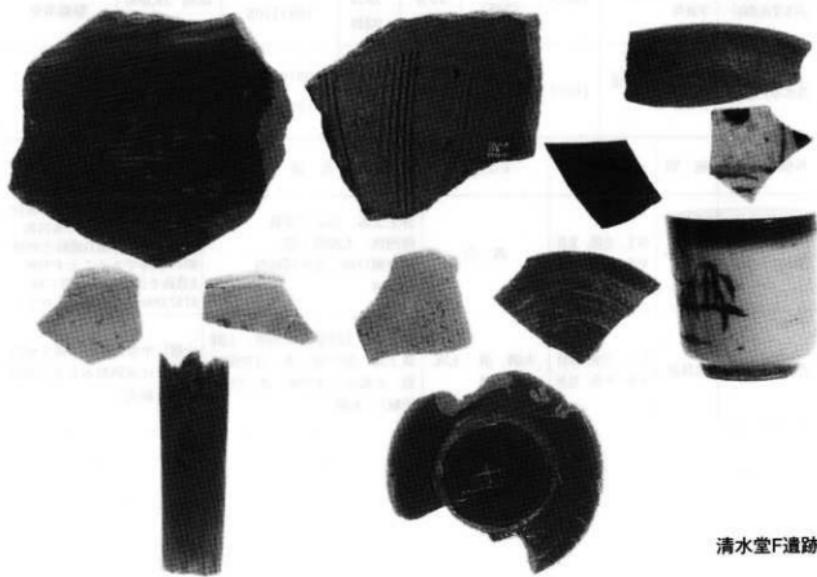
6

清水堂F遺跡

1. SD01
2. SD01土層
3. 漆塗り椀蓋
4. 木製品出土状況
5. 下層完掘（北より）
6. 風倒木



清水堂E遺跡



清水堂F遺跡

報告書抄録

書名	富山市水橋 清水堂E遺跡 清水堂F遺跡							
シリーズ名	県営低コスト化水田農業大区画整備事業(清水堂地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査概要							
シリーズ番号	(3)							
編集者名	鹿島昌也							
編集機関	富山市教育委員会							
所在地	〒930-8510 富山県富山市新桜町7番38号 TEL (0764) 43-2138							
発行年月日	西暦 1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
清水堂E遺跡 (清水堂南遺跡)	富山水橋清水堂 字道角	16201	248 (245)	36度 42分 52秒	137度 19分 03秒	19970519～ 19971105	試掘 29,000	県営ほ場 整備事業
清水堂F遺跡	富山水橋清水堂 字東側	16201	249	36度 42分 43秒	137度 19分 10秒	19970616～ 19970924	発掘 600	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
清水堂E遺跡 (清水堂南遺跡)	集落跡	弥生、古墳、奈良 平安、中世、近世	溝、穴	弥生土器、古式土師器、 珠洲焼、土師質土器、 越中漸戸焼、近世陶磁器、 漆塗椀	13,000m ² に遺跡の所在を確認。 弥生後期～終末期の集落跡。 隣接する清水堂D遺跡と同時 期の遺跡であることが判明。 2遺跡を清水堂南遺跡に統一。 計17,000m ² に集落が広がる。			
清水堂F遺跡	集落跡	弥生、古墳、奈良 平安、中世、近世	大溝、溝、土坑 風倒木跡	須恵器、土師器、珠洲焼、土師 質土器、越中漸戸焼、近世陶磁 器、木製品(漆塗椀、箸、杓子、 下駄)、木簡	上層に中世以降の遺構を検出。 下層には流路数本および風倒 木跡を検出。			

県営低コスト化水田農業大区画整備事業
(清水堂地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査概要(3)

富山市水橋

清水堂E遺跡 清水堂F遺跡

編集・発行 富山市教育委員会

〒930-8510 富山市新桜町7番38号

発 行 日 1998年3月31日